

逝去された名誉会員等への追悼文

青山英康先生を追悼して



- 1935年 2月12日 生まれ
- 1959年 岡山大学医学部卒業
- 1964年 岡山大学大学院医学研究科卒業
- 1969年 ジョーンズ・ホプキンス大学公衆衛生大学院修了
- 1970年 岡山大学医学部助教授
- 1980年 岡山大学医学部教授
- 1994年 日本学術会議会員
- 2000年 岡山大学名誉教授
- 2003年 高知女子大学学長

日本公衆衛生学会名誉会員であった青山英康先生は、平成29年8月6日に逝去されました。ご生前のご厚情に深く感謝するとともに、ご功績を偲び、僭越ながら追悼文を書かせて頂きます。

先生は、昭和10年に満州の大連市にお生まれになりました。実家は新聞社であったとお伺いしたことがあります。先生の日本人離れした大陸的でおおらかな性格は、その地で育まれたと思います。戦後、岡山に移られ、昭和34年岡山大学医学部、昭和39年岡山大学大学院医学研究科を卒業（医学博士）されています。その間、昭和38年に国立公衆衛生院での1年間の研修をされました。大学院を卒業後、直ちに助手に採用され、昭和44年には Rockefeller Fund のサポートを得て THE JOHNS HOPKINS UNIVERSITY を卒業され、MPH を取得されています。昭和45年には岡山大学医学部助教授に、昭和55年には岡山大学医学部教授に就任されました。平成5年には、THE JOHNS HOPKINS UNIVERSITY から Outstanding International Graduate Award in Public Health Leadership を受賞されています。平成6年には日本学術会議会員（第16期）に選出されました。平成12年には岡山大学医学部教授を定年退官し、岡山大学名誉教授の称号を授与されています。平成15年には、請われて高知女子大学・高知短期大学・学長に就任されました。平成19年には任期満了により高知女子大学・高知短期大学の両学長を退職され、平成23年には高知県立大学名誉教授の称号を授与されています。また、日本公衆衛生学会、日本衛生学会、日本産業衛生学会、日本プライマリ・ケア学会、日本学校保健学会、日本民族衛生学

会、日本人類動態学会、日本大気汚染学会などでも要職を務められました。

青山教授は、日本の社会医学系の教授のなかでも比較的早い時期に米国で MPH を取得され、学んだことを学部生、大学院生の教育、社会貢献活動に生かされました。私が大学院生の時は、僻地・都市部の診療所、保健所、産業保健のフィールドがあり、社会医学的な立場から、地域の住民や職場で働く人々の健康を支援することを学ぶことができました。また、卒後臨床研修において2年間のスーパー・ローテーション（1年10カ月間の岡山市内の国立病院と赤十字病院、労災病院、済世会病院での臨床研修と2カ月間の実地医家・保健所での研修）を実施し、大学院生が毎年コンスタントに教室に入って来る仕組みを作られました。これらの成果として、門下生から医学部教授が11人、厚労省の局長が4名、国会議員が2名、医学部以外の学部・学科の教授・助教授・講師等の教職員は数十名、厚労省以外の国内外や地方行政機関の行政官が常時数十名輩出しています。

青山先生が学問的にカバーした社会医学の分野は多岐に渡りますが、自分の専門分野は医療経済学とおっしゃっていました。医療経済学に関して青山先生から教えて頂いたことで、今でも覚えていることが三つあります。一つ目は、「医療提供者、患者、保険者の利害は絶対に一致しない。だから医療政策には利害調整は避けられない」というものでした。二つ目は、「保険者の使命は、最低の保険料で最高の健康を提供することである」と主張されていました。そのために、保険者には熱心に保健事業をすることを勧めていました。最後は、「質の良い医療には高い報酬を支払い、質の悪い医療には、それに見合った報酬しか出さないのが優れた診療報酬制度」だというものでした。これは、P4P (Pay for Performance) の考え方であり、現在ではどの先進国においても部分的には採用されるようになっています。

今後、公正で効率の良い医療資源の分配と医療の質の改善に貢献できるエビデンスを明らかにし、医療提供者、患者、保険者の利害を調整し、「良い医療を社会に届ける仕組みを構築する研究・教育を行うこと」も、青山先生に教えを受けた者達が恩返しをする途だと考えています。

九州大学大学院医学研究院医療経営・管理学講座教授
馬場園明

飯田澄美子先生を偲んで



- 1930年 3月6日 生まれ
 1952年 聖路加女子専門学校（現
 聖路加国際大学）卒業
 1952年 神奈川県川崎中央保健所
 1955年 東京大学医学部衛生看護
 学科公衆衛生看護学助手
 1962年 実践女子大学講師・実践
 女子短期大学保健主事
 1967年 神奈川県立衛生短期大学
 看護学科教授
 1984年 聖路加看護大学公衆衛生
 看護学教授
 1997年 聖隷クリストファー大学
 看護学部地域看護学特任
 教授

日本公衆衛生学会名誉会員の飯田澄美子先生が、
 本年4月7日に逝去されました。

飯田先生の歩みは、日本の看護学の開拓の歴史と
 重なっています。

先生は、1952年3月に聖路加女子専門学校（現、
 聖路加国際大学）をご卒業後、直ちに、神奈川県の
 川崎中央保健所で保健師として勤務されました。丁
 度、1953年に、東京大学医学部に衛生看護学科が開
 設されましたが、その実習の引受先が無くて困っ
 ていることを聞き、自分が担当している地区で実習を
 引き受けられました。「当時は、衛生看護学科の学
 生たちは、レントゲン写真ばかり見ててね、。困っ
 ちゃって、。。」と、後年、笑いながらおっしゃっ
 ていました。

この実習がご縁で、1955年4月から東京大学医学
 部衛生看護学科に、助手として勤務されるようにな
 りました。当時の公衆衛生看護学教室です。「新しい
 学問を作るという気概に満ちていた」と、そこで
 研究の厳しいトレーニングを受けたことが、後年と
 ても役に立ったということでした。ここで、学科主
 任を兼担されていた福田邦三教授に出会い、カウ
 ンセリングを専門にすることを勧められました。ま
 た、当時存在した東大病院分院の健康指導部で、保
 健指導に関わる先駆的な活動をなさいました。分院
 の集団会でも話をされ、高い評価を受けられたとい
 うことです。その後、福田教授の異動と共に実践女
 子大学に奉職され、養護教諭の養成に携わると共
 に、保健主事としてカウンセリングを実践され、経
 験を積まれました。また、事例検討も積み重ねら
 れ、その成果が、後年、「ケアの質を高める看護カ
 ウンセリング」として、医歯薬出版から見藤隆子先

生との共同編著で刊行されています。

その後、1967年4月に神奈川県立衛生短期大学に
 教授として着任され、看護学科（養護コース）の主
 任として、多くの学生を育てられました。私も、こ
 の時期に助手として採用され、飯田先生の薫陶を受
 けました。教育はチームで動いていること、各々の
 職位の役割、人を尊重するという、交流分析と
 心の持ち方・対処方法等、折に触れて多くのことを
 教わりました。また、博士号を取得することを強く
 勧められました。この時代は、養護教諭養成と看護
 を結びつけることはタブー視する風潮があったの
 ですが、飯田先生は全国に働きかけて、7大学で「学
 校看護研究会」を組織し、養護教諭に必要な看護学
 について検討を進められました。

1984年からは、母校である聖路加看護大学（現、
 聖路加国際大学）に公衆衛生看護学の教授として就
 任されました。当時、聖路加は、日本で最初に看護
 学の博士課程を作ろうとして、博士号を持つ人材を
 多く集めていました。私も呼んでいただき、再度、
 先生の下で働かせていただきました。修士課程の院
 生も多く、飯田教授の指導に同席して学びました。

この時期は、看護学が社会的認知を受け始めた時
 期で、厚生省の研究事業が看護界としては初めて、
 聖路加の松下和子教授に委託されました。そこで、
 飯田教授の指揮の下、院生を含めて中央区の在宅高
 齢者宅を一軒一軒訪問し、ニーズ調査をしました。
 これが、その後の看護職による地域調査のモデルの
 一つとなりました。聖路加看護大学からのご退職に
 伴い、1997年4月から、聖隷クリストファー大学
 看護学部で地域看護学の特任教授となられました。最
 期の数年間は、町田市の（お城のような建物とい
 つても美しい花の咲く庭園をもつ）高齢者施設で、居
 間から富士山を見つつ自炊をして、豊かに過ごされ
 ました。

飯田先生のご専門は、家族保健指導、ヘルスカウ
 ンセリングを含む学校保健です。また、実践を重視
 する立場から、「実践保健学」のシリーズを福田邦
 三先生と杏林書院から刊行していらっしゃいます。
 教え子も多く、日本全国で、地域看護学/公衆衛生
 看護学の教員として活躍しています。よく話題にな
 るのは、飯田先生のお人柄の良さとポジティブに物
 事をとらえる姿勢です。困難等も全てプラスにとら
 えられるので、そういう気の持ち方を傍で学んだこ
 とが、現在の私も支えているのだと、訃報に接して
 改めて認識した所です。

飯田澄美子先生、ありがとうございました。

大分県立看護科学大学 理事長・学長
 村嶋幸代

追悼 倉恒匡徳先生、疫学の先駆者



1920年 8月4日 生まれ
 1944年 九州帝国大学医学部卒業
 1945年 陸軍軍医学校
 1953年 九州大学医学部助教授
 1960年 九州大学医学部教授
 1977年 九州大学医学部長
 1984年 九州大学名誉教授
 1984年 中村学園大学教授
 1985年 中村学園大学学長

名誉会員の倉恒匡徳先生（九州大学名誉教授）が平成28年10月14日に福岡市においてお亡くなりになりました。享年96歳でした。先生は、昭和19年9月に九州帝国大学医学部を卒業され、九州大学助教授（衛生学講座）、米国国立がん研究所研究員を経て、昭和35年12月に九州大学医学部公衆衛生学講座教授に就任されました。23年余りにわたり大学における社会医学の教育と研究に尽くされました。この間、昭和57年には第41回日本公衆衛生学会総会を開催されました。昭和59年3月に九州大学を定年退職された後には、中村学園大学・短期大学に奉職され、第5代学長（昭和60年4月～平成3年3月）を務められました。

私は昭和50年代に倉恒先生の研究指導を受けました。先生は、当時から国際的に高名な疫学者でありましたが、初期には環境発癌物質の化学分析をされていました。喫煙や大気汚染が肺癌の原因ではないかと考えられ始めた頃（昭和30年前後）、タバコ煙中にベンツピレンが含まれていることを化学分析により世界で初めて報告されました。さらに、肺癌死亡が異常に高率であった米国ニューオーリンズに多数存在するコーヒー工場から排出され、大気を汚染していた「コーヒー煤」の中に比較的高濃度のベンツピレンとその他の芳香族炭化水素が含まれている事を証明されました。加熱食品中の芳香族炭化水素化合物の分布についても研究を進められました。

疫学への関心は、昭和43年に西日本地域に起こった油症事件が契機になったようです。PCBに汚染

された米ぬか油が原因であることが証明されましたが、九州大学の全学的連携研究の成果であることを強調されていました。昭和50年には化学分析により油症患者が使用していた米ぬか油にポリ塩化ジベンゾフランが含まれていることを示されました。現在、九州大学には油症研究センターが設置されています。倉恒先生を中心にまとめられた英文書籍“Yusho”（九州大学出版1996年）は国際的の学術書になっています。

銅精錬所従業者の肺癌に関する研究は、疫学研究の有用性を示された世界的研究です。大分保健所管内某地区の肺癌死亡が異常に高率であることが保健所の調査で分かり、2つの疫学研究をおこなわれました。昭和50年前後のことです。死亡票を用いた症例対照研究では、銅精錬所に職業性肺癌が発生していることを示されました。ついで、労働省の依頼を受けて精錬所内部資料を用いたコホート研究を行い、銅精錬作業と関連した肺癌死亡の高まりを明らかにされました。「正確・公平な疫学的調査結果に対し、精錬所その他の関係者から反論は一切なく、他の公害事例等に見られたような不毛の混乱は生じなかった。むしろ精錬所は積極的に必要な癌予防対策を講じた」と話されていました。疫学の方向性を示されたお言葉です。倉恒先生の数多い研究業績のなかで特に印象深いのは、国民栄養調査にもとづいて作成した日本人の典型的食事の食物繊維を測定した研究です。大腸癌が低率であった時代の日本の食物繊維摂取量は、北欧や英国の摂取量と変わらないことを論じています（JJCR 1986）。

銅精錬作業の職業癌に関する研究に対しては、労働大臣功績賞（昭和49年）及び労働大臣功労賞（昭和55年）が授与されました。また、公衆衛生学、産業医学およびその他の内外における顕著な功績により勲二等旭日重光章の叙勲を受けられました（平成6年4月）。倉恒先生の訃報は、昨年12月に長女の方から連絡を受けましたが、「見送りは静かに家族だけで」とのご遺言だったそうです。倉恒匡徳先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

九州大学名誉教授
古野純典

嶋本喬先生のご功績を偲んで



- 1938年 4月27日 生まれ
- 1964年 大阪大学医学部卒業
- 1969年 大阪府立成人病センター
- 1981年 筑波大学社会医学系地域医療学助教授
- 1991年 筑波大学社会医学系地域医療学教授
- 2001年 大阪府立健康科学センター所長
- 2007年 大阪府立健康科学センター名誉所長

日本公衆衛生学会名誉会員の嶋本喬先生が、平成28年12月3日病によりご逝去されました。先生は、昭和13年4月27日兵庫県に生まれ、大阪大学医学部及び同大学大学院において関悌二郎教授に師事し、その後、小町喜男先生（現：筑波大学名誉教授）のもと大阪大学医学部公衆衛生学教室副手、大阪府立成人病センター調査部集検一課医長、同センター集団検診第一部循環器検診第一科部長、大阪大学医学部講師、筑波大学社会医学系地域医療学助教授を経て、平成3年5月に筑波大学社会医学系地域医療学教授に就任されました。平成13年4月に退職された後は、財団法人大阪府保健医療健康財団大阪府立健康科学センター所長、千里金蘭大学生活科学部食物栄養学科教授を歴任されました。先生の教育および研究等の顕著なご功績により、平成14年4月には筑波大学名誉教授の称号を授与され、平成28年12月には従四位瑞宝小綬章を受勲されました。

先生は、公衆衛生学分野、とりわけ脳卒中予防を初めとする成人保健、地域保健・地域医療における研究、教育、実践を40年以上にわたって尽力され、わが国の公衆衛生学分野の発展に多大な貢献をされました。WHOの共同研究において、わが国の脳卒中発生率が欧米諸国に比べ高いことを実証し、国内での研究では、脳卒中は農村集団に多発すること、

その発生要因として高血圧が重要であることを明らかにされました。さらに、農村の生活環境の影響が強く、脳卒中発症率および高血圧者の頻度が高い地域集団は、都市的な地域集団に比べて、食塩摂取量が多いこと、動物性食品の摂取量が少ないこと、過重な肉体労働が多いことを詳細に観察し、わが国の伝統的な食生活・労働等の生活環境が脳卒中多発をもたらした背景であることを詳細に示されました。その後、全国的な規模の疫学共同研究に参画し、生活環境の変化が循環器疾患に及ぼす影響に関する経年的な調査を実施し、農村では肥満者の頻度が増加傾向にあるにもかかわらず血圧値の下降傾向がみられること、従来低値であった血清総コレステロール値のレベルが上昇し、都市集団との差が縮小されたこと、さらに、長期に亘る疫学研究継続の成果として、親子二世代の同年齢時の血圧値を比較し、遺伝的な要因を考慮してもなお、農村における血圧値の低下は降圧剤治療普及の影響以外に、生活環境の変化によってもたらされた部分が大きいことを疫学的に実証しました。

当時、現在ほどコンピューターが発達していない時代において、先生の質的並びに量的データの分析と、論文の査読・編集力には卓越したものがあり、論文の原文が見えなくなるほど指導していただいた経験が多々あります。そのことがわたくしの現在の学生への指導に結び付けております。

わたくしを含め、先生にご指導をいただいた門下生は、今日の公衆衛生学分野において行政・教育・研究の各方面で活躍しております。公衆衛生分野、とりわけ循環器疾患予防に懸けた先生の情熱と意志を受け継ぎ、次代の公衆衛生人材の育成に取り組んで参ります。

ここに嶋本喬先生のご功績を偲ぶと共に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

大阪大学大学院医学系研究科
社会医学講座公衆衛生学 教授
磯 博康